

### 寺井 琢也 TERAJ, Takuya

役職 准教授  
所属 化学専攻  
着任日 2022年12月1日  
前任地 化学専攻  
キーワード

ケミカルバイオロジー, 生体分子化学

#### Message

人間を含む地球上の全ての生命は生体分子からできています。その仕組みを明らかにするとともに、面白い機能を持つ(+あわよくば役に立つ)新しい分子を作っていきたいです。どうぞよろしくお願いします。



## おしらせ |

### 宮沢弘成先生ご逝去の報に接して

松尾 泰 (物理学専攻 教授)

**宮** 沢弘成先生の訃報に接し、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、1927年東京府に生まれ、1950年東京大学理学部大学院に進学後、1952年に同大学助手に就任された。翌年博士号を取得後、講師、助教授を経て1968年に教授に昇任された。1988年に停年退官されるまで36年の長きにわたり東京大学で物理学の研究・教育に努められた。

先生は素粒子と原子核の理論的研究、なかでも強い相互作用の研究で著しい業績を上げられた。分散公式の理論やハドロンの共鳴状態、核力、素粒子の対称性などについて数多くの優れた仕事をされている。先生の業績を二つ挙げるとすると、一つは1957年に藤田氏と共同研究された原子核内の相互作用としての「三体力」の提案、

もう一つは1966年の統計性が異なる素粒子間の「超対称性」があげられる。どちらの研究も原子核と素粒子論の発展に現在に至るまで大きな影響をあたえる先駆的かつ重要なお仕事であった。これらの業績に対して、1993年東レ科学技術賞、2021年素粒子メダルが授与されている。

新たな事に挑戦し続ける先生の姿勢はセミナーや合宿などを通じて学生にも伝わり、多くの独創的研究者が育った。また世界に羽ばたいた卒業生達は、常にドアが開放された先生の部屋を訪れ、新たな発想について聞いてもらうのを楽しみとしていた。

宮沢先生の東京大学や学術への多大な貢献に感謝するとともに、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



2016年講義にて (宮沢弘成先生)

## 博士学位取得者一覧 |

(※) は原題が英語 (和訳した題名を掲載)

種別	専攻	取得者名	論文題名
<b>2023年1月23日付 (4名)</b>			
論文	生科	佐野 智	恒星間移住における最小存続可能人数と進化速度に関する集団遺伝学的・文化進化論的解析：宇宙人類学への定量的アプローチ (※)
課程	地惑	米島 慎二	地震学的構造不均質を有する海洋プレートの沈み込みに関する研究 (※)
課程	生科	松田 直樹	筋管1細胞レベルのミトコンドリアATPのモニタリングと数理モデルによる2細胞集団の特性の解明 (※)
課程	生科	田中 優実子	1細胞解析技術を用いた2型自然リンパ球の分泌応答の研究 (※)
<b>2023年1月31日付</b>			
課程	物理	丸井 幸博	金属薄膜における電流誘起磁気光学 Kerr 効果

## 人事異動報告 |

異動年月日	所属	職名	氏名	異動事項	備考
2023.1.16	化学	助教	丁 天本	採用	
2023.1.31	アト秒	助教	安藤 俊明	退職	同施設・特任准教授へ
2023.1.31	生科	特任助教	山崎 洋人	退職	長岡技術科学大学・特任講師へ
2023.1.31	フォトン	特任助教	中村 卓磨	退職	
2023.2.1	アト秒	特任准教授	安藤 俊明	採用	同施設・助教から
2023.2.1	物理	特任助教	田中 克大	採用	先端科学技術研究センター・特任研究員から
2023.2.16	化学	特任准教授	北濱 康孝	採用	同専攻・特任研究員から
2023.2.16	化学	特任助教	LISI FABIO	採用	
2023.2.28	天文研	助教	廿日出 文洋	退職	国立天文台・准教授へ

## ◆ 編集委員会より退任の挨拶 ◆

私が学生の頃は、理学部ニュースの存在は知りつつも、ほとんど読んだことはありませんでした。しかし、編集委員になって毎回目を通してみると、理学部の皆様の幅広いご活躍や最先端研究を知ることができるひじょうに良い雑誌だったことに気付きました。今後の研究の種もたくさん散りばめられています。これまで理学部ニュースを読まなかったのは、本当に損でした。

編集委員では、広報室の武田加奈子さん、編集委員長の

安東正樹先生をはじめ、委員の皆様には大変お世話になりました。執筆いただいた先生方や学生さん達にも感謝しております。コロナ禍で会議もオンラインだったため、皆様に直接お会いする機会も少なく、恒例だった懇親会も自粛されていたので、編集委員としての本当の楽しさ(?)を味わえなかったのは残念ですが、これからも一読者として理学部の皆様のご活躍を拝読して、研究のネタを探したいと思います。

池田 昌之 (地球惑星科学専攻 准教授)

理学部ニュースの編集委員を2年間担当しました。理学系研究科に着任して日の浅い時期から担当させていただき、理学系研究科・理学部で行われている本当に幅広い研究について知り、またそれを発信する大切さ、大変さについて多くのことを学べる貴重な経験になりました。編集の仕事に携わりながら、多くの方に支えられて作られている理学部ニュースの魅力をより感じるようになり、一人でも多くの学生さんや読者の方に届いてほしいという思いとともに、毎号編集に関わるようになりました。なかなか研究

とは違う「頭」を使うこともあったか、苦勞することや他の方にご迷惑をお掛けすることも多かったです。編集委員長の安東正樹先生をはじめとする編集委員の皆様のおかげで、素晴らしい理学部ニュースの一翼を担うという光栄な任務を終えることができました。今後も一人でも多くの方に手に取っていただけるような理学部ニュースとして発展していくことを陰ながら応援しています。どうもありがとうございました。

稲垣 宗一 (生物科学専攻 准教授)

## 東大理学部基金

✚ 限界を突破し、科学を進め、社会に貢献する。  
理学部の若手人材の育成にご支援ください。

ご支援への感謝としての特典

(1月から12月までの、1年間のご寄付の合計金額)

3,000円以上：理学部カレンダー(非売品)・クリアファイルのご送付



東京大学大学院理学系研究科長・理学部長

星野 真弘

理学系研究科・理学部の歴史は、東京大学創設の1877年(明治10年)までさかのぼり、昔も今も、自然の摂理を純粹に追及するプロフェッショナル集団として、日本のみならず、世界の理学研究・教育の中心として、多くの成果と人材を輩出しております。

理学の研究によって、われわれは自然の摂理をより深く理解し、またそこから科学技術へ応用できるシーズを得て人類社会を進展させてきました。近年、ノーベル賞を受賞した梶田隆章先生(2015年)、大隅良典先生(2016年)、真鍋淑郎博士(2021年)の研究はいずれも人類の「知」の地平を拡大する画期的な成果となり、まさに理学の神髄というべきものでした。

一方、「自然」はもっと深淵で、手ごわく、時としてわれわれの慢心や驕りに強い警鐘を鳴らします。現在、人類社会は多くの地球規模の難問、たとえば資源の枯渇、自然災害、環境破壊、気候変動などに直面しています。これらの問題の解決策についても、多様な切り口を持ち、事象を深く理解する理学への期待がさらに高まっています。理学系研究科・理学部は、これからも最先端の「知」を創造し、その期待に応えていきます。

そのためには皆様の力が必要です。理学系研究科・理学部は人類社会の持続的・平和的發展に向けて、皆様と一緒に、大いに貢献していきたいと切に願っております。皆様の力強いご支援を賜りたくお願い申し上げます。